Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-06-01

新説鹿之瀬漁業権の成立

鷲尾, 圭司

(Citation)
海事資料館研究年報,22:1-7

(Issue Date)
1994

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81005671

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005671

新説　鹿之瀬漁業権の成立

鷲　尾　圭　司（林崎漁業協同組合企画研究室）

1．鹿之瀬

播磨灘の東北部に「鹿之瀬」と呼ばれる好漁場が広がる。明石海峡の強い潮流が作り上げた複雑な海底地形。起伏に富み、砂や砂利さえ吹き飛ばされた岩盤の侵食地形から、泥の吹き溜まり、吹き上げられた砂の積もった浅瀬など、海水がなければグランドキャニオンに勝るとも劣らない景観が広がることだろう。ここが、明石ダコや明石ダイを育む海の宝庫であることは地元の漁師はもとより、釣り人や住民も一目置くところ。

現在では、明石市内4漁協と淡路島北端町内の4漁協の合わせて8漁協の共同管理になっているが、明治時代に至るまで多くの漁場紛争の舞台となったところだ。

江戸時代初期に作られた『播磨鑑』の明石郡の項には「鹿之瀬、当浦林村ヨリ小豆島マデ瀬筋八里継グ。六里程西ハ幅広シ、昔当浦ヨリ小豆島マデ、コノ瀬ヲ鹿ノ通行シケル故ニ号ス」とあり、浅瀬の根もとにあたる林村（現在の林崎）が、昔からこの好漁場を専有してきたことをうかがい知ることができる。しかし、豊かな海の幸をめぐり、海に境界線が引けないこともあって、周辺漁村からの入り込みが画策されたことは想像に難くない。

詳細については、『明石さかなの海峡（鹿ノ瀬の素顔）』神戸新聞明石総局編や『蛸の国』井上喜平治著、『播州東二見浦漁業の歴史』黒田義隆ほか著などにみることができる。

史料の上で、最初に鹿之瀬の漁場紛争が登場するのは、天正年間（1573～1592）秀吉の時代のこと。鹿之瀬の専有権を主張する林村に対して、西に位置する加古郡の漁村から入会いを求める訴訟があり、大阪の奉行所が「鹿之瀬は代々林村のもの」と裁定したもの。

余談にはなるが、この訴訟に多大な費用がか

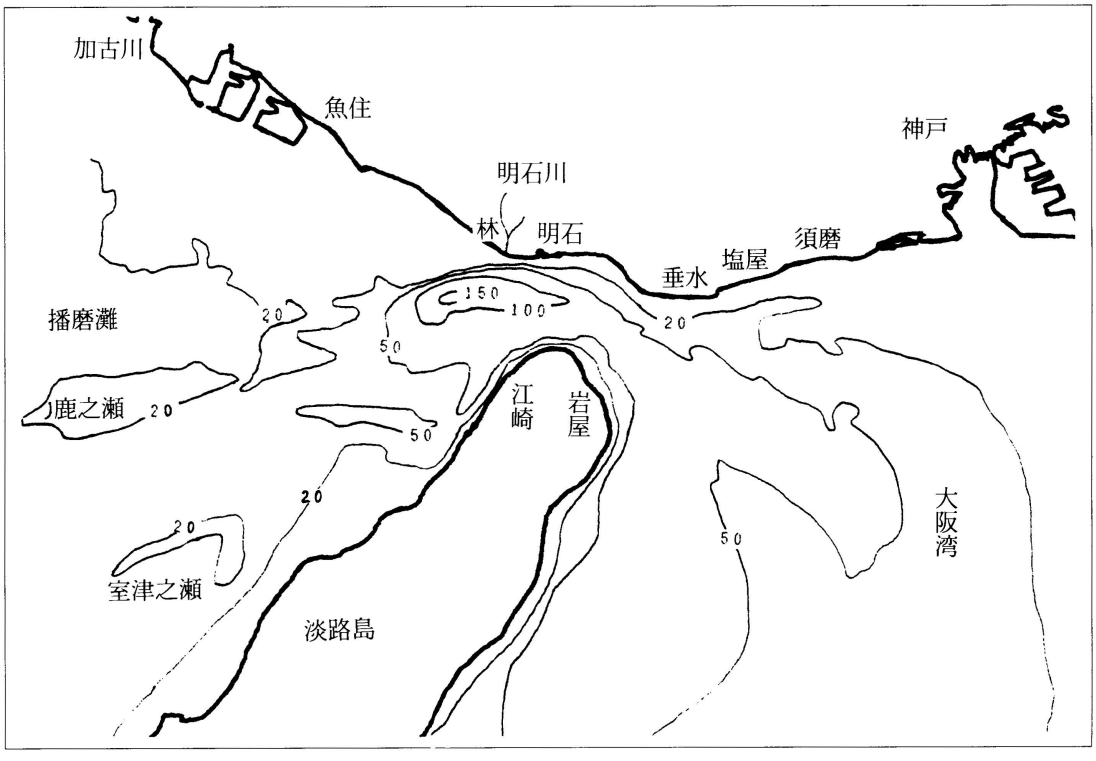
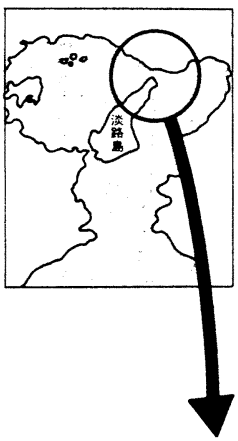


図1．明石海峡と鹿之瀬周辺図

かり、林村は大阪の商人に鹿之瀬漁場を質入れして工面したという。漁場が質草になった例などあまり聞かない話だが、それだけ生産力が大きく安定した資産価値のある漁場だったのだろう。この漁場質入れについては、別に一考察する。

では、林村に鹿之瀬の漁業権を与えたものは一体誰だったのだろう。上記の訴訟以前の鹿之瀬の権利関係を記した史料は、今のところ見つかっていない。他の地方では、秀吉が朝鮮出兵のおりに水夫の調達や海運に功があったとして漁業権を与えた例は、香川県の庵治町などいくつか見られるが、それ以前の時代の記録は筆者は見出しえていない。そこで、筆者の空想の域を出ない話だが、鹿之瀬漁業権の成立を解きほぐしてみたい。



2．潮流が味方する漁村立地

明石海峡の潮流は、大潮の午前中は上げ潮となって大阪湾から播磨灘へ向かい、海峡の深みから鹿之瀬へと吹き上げる。イカナゴやイワシなどの小魚は遊泳力が弱く、流れが強いと潮目に吹き寄せられ、この鹿之瀬が格好の餌床となる。イカナゴなどを直接狙う「餌床（えどこ）すくい」という大網ですくい揚げる漁や、餌場に群がるタイやサワラを釣る漁にも適した場所となる。

一方、小潮の午前中は下げ潮となって播磨灘から大阪湾方向へ向かう。流れのゆるやかな時は、磯のアイナメやメバルなどの根魚やマダコが活躍するので、海峡中央部の岩礁地帯がポイントになる。

漁獲に適した朝早く、林村から沖に漕ぎだすと、大潮には上げ潮に乗って鹿之瀬へ、小潮には下げ潮に乗って海峡中央部へ労なくたどり着

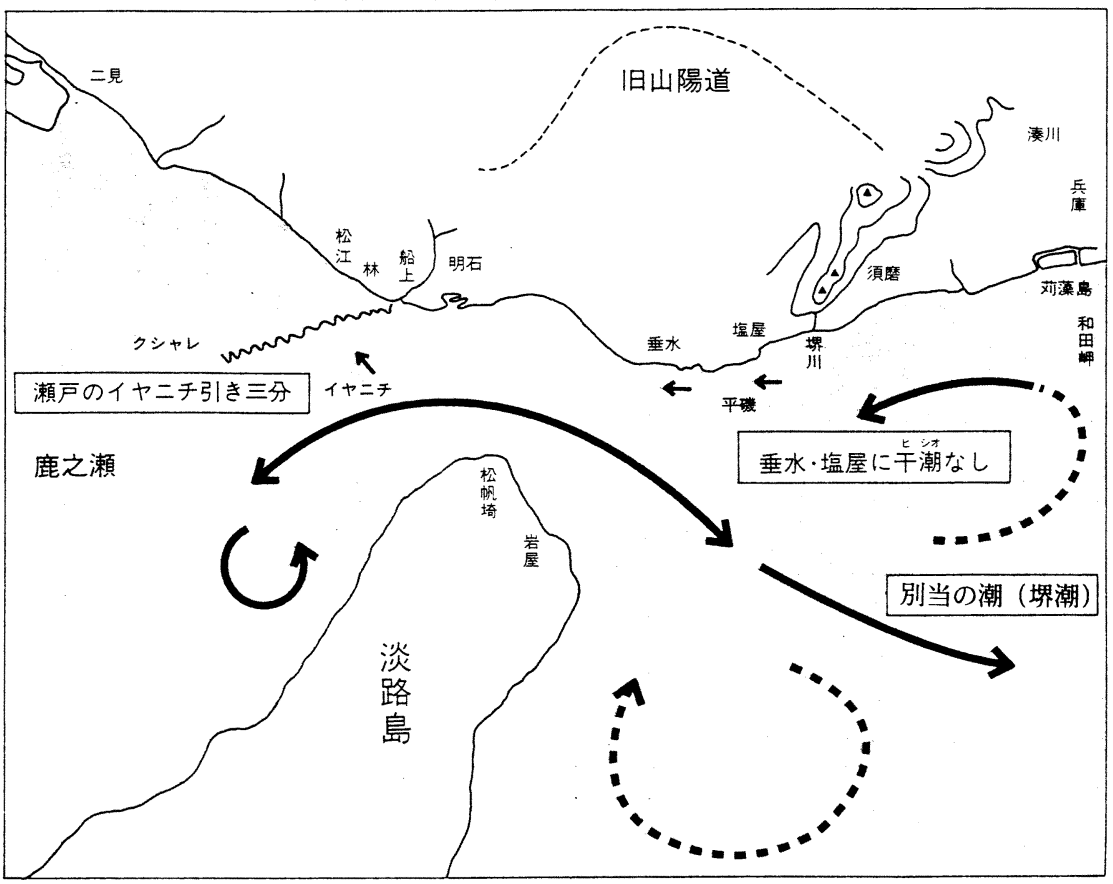


図２．明石海峡の潮

けるわけだ。昼になって漁を終えるころには、ちょうど潮が逆になり、これも楽々帰り着くことができる。潮時に応じた漁場に、潮を利して行き来できる立地条件。潮流の知識が体系だっていなかった昔には、林村には神様のご加護があると信じられて当然だっただろう。林村の宝蔵寺に祀られる毘沙門天は、鹿之瀬の海底から拾い上げられたものと伝えられ深く信仰されていることも、村人の心情を表わしているといえるだろう。

明石海峡もずいぶん様変わりしたと言われることも多いが、潮流の基本は現在も昔も変わっていない。複雑な海底地形と航行を悩ませる潮流の変化、海中に潜む水族の生態などを熟知した海人集団が、明石海峡の中でも絶好の位置に林村を形成させてきたことは想像に難くない。

このことによって、他よりも強い漁業集団が形成されたことは想像できる。だが、これだけでは漁場専有の根拠には至らない。鹿之瀬は林村から地続きの磯だからというのも、10km以上も先にまで権利を認めるには力不足といわざるをえない。

3．技術史にみる整合性

鹿之瀬の古典的漁業といえばタコツボ。いまだに海底から拾い上げられたり、弥生時代の遺跡からも発掘されているタコツボはイイダコ用の小型のものばかり。大人のこぶしほどの大きさの、湯飲み状のものや釣鐘型のものもある。二千年以上前から工夫されてきたのだろうが、明石海峡周辺では明石ダコ（マダコ）用の人の頭ぐらいの大きさのタコツボは見当たらない。潮の速い鹿之瀬で大型のタコツボが使われるようになったのは、いつの時代からだろう。

室町時代の前、南北朝時代は技術革新の時代といわれる。西洋のルネッサンス期と同時代というより、半世紀前にあった蒙古来襲前後の大陸の動乱が、多くの技術者を大陸からもたらした時代とみることができる。

タコツボのような素焼きの土器は、もともとは「野焼き」といい、焚き火の中で焼かれていた。これでは焼結温度が低く、大型のタコツボサイズでは水差しなどの容器には使えても、海底に上げ下ろしするばかりか、潮流の速さに石床を転がすような乱暴な扱いでは強度不足を生じたことだろう。結果として、野焼きでも強度が足る小型のものだけが実用に供された。あるいは、大型のものは流れの弱い内海でのみ使われたことだろう（『香川県漁業史』には、7世紀にはマダコ用のタコツボもあったという）。

南北朝時代の焼きものには、明石市西部の魚住の産といわれる擂り鉢が大量に発見されている。淡路島西浦の室津の瀬の沈船から引き揚げられたもので、四国方面に交易に向かう途上だったと推定されている。この時代から、味噌やゴマなどの擂る料理が広まったこととも符号する。

また、この沈船はそれまでの丸木船に毛の生えたような小舟ではなく、木材を組み合わせた構造船であった。造船の世界でも、国産の構造船が出来るようになり、舟の大型化で海上輸送力も飛躍的に伸びてきた時代といえよう。

擂る作業に耐える強度の焼きものが出来るようになったことは、「釜焼き」によって焼結温度が高められるようになったもの。この擂り鉢のついでに、大型のタコツボがご当地で焼かれ

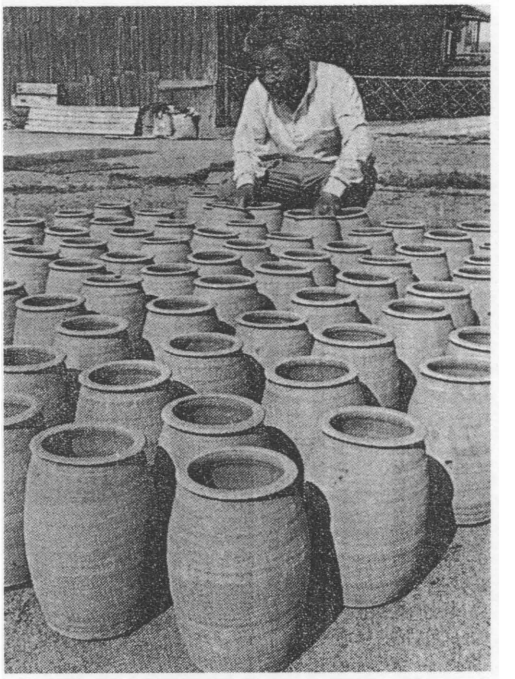


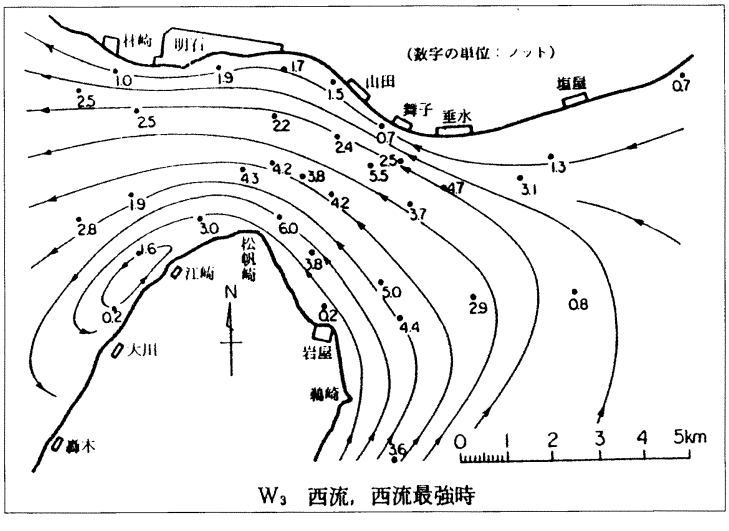
図2．素焼きのタコツボづくり
ろくろで成形したタコツボを
天日干しにし、窯で焼く。

るようになったとすれば、この時代から潮の速いマダコ漁場用のタコツボが広まったとみることができよう。そして、タコツボを焼く職業は当地で今日に至るまで伝えられてきている。

鹿之瀬での漁業で、浮き魚を相手にするものは操業時間中だけの優先権があれば良いわけだが、タコツボとなると海底に張り付けになるわけだから、漁場そのものの専有が必要になる。沖合いの鹿之瀬マダコ漁場が、このタコツボと大型化した漁船によって開発されていったとみることは出来ないだろうか。海上十数キロという漁場を、組織的に支配する技術的条件は、この時代になって初めて形成されたのではないだろうか。

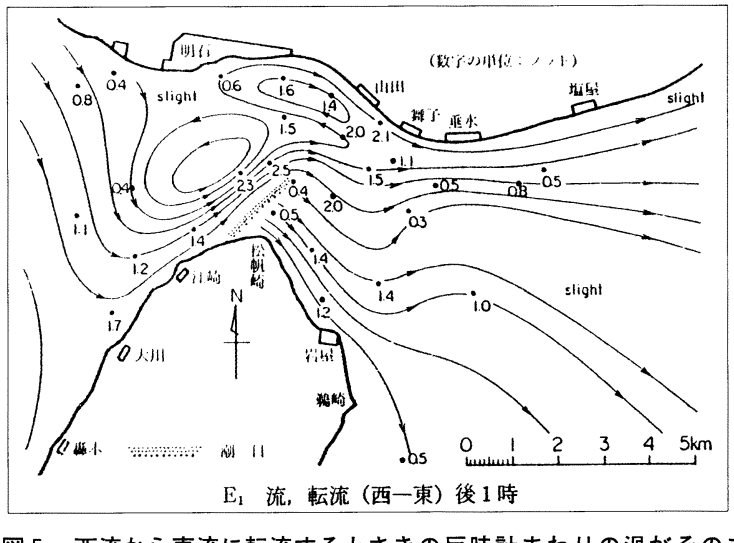
4．明石海峡の潮流にまつわる歴史

「天離る　鄙の長道ゆ　恋ひ来れば　明石の門より　大和島見ゆ（巻三－255）」や「「燈火の　明石大門に　入らむ日や　漕ぎ別れなむ　家のあたり見ず（巻三－254）を残す柿本人麻呂など万葉歌人が行き来した時代（8世紀）には、明石海峡は嫌な波立ちの多い難所として



W_3　西流，西流最強時

図4　西流最強時になると江崎西に反時計まわりの渦が発生する。



E_1　流，転流（西―東）後1時

図5　西流から東流に転流するとさきの反時計まわりの渦がそのまま海峡に入ってきて、明石沿岸には東流時なのに西流が生じる。これを「イヤニチ」と呼ぶ。（「岩屋ニチ」と呼ぶ人もあり、岩屋から来る流れの意）

描かれている。

「海神は　くすしきものか　淡路島　中に立て置きて　白波を　伊予に廻らし　居待月　明石の門ゆは　夕されば　潮を満たしめ　明けされば　潮を干れしむる　潮さゐの　波をかしこみ　淡路島　磯隠りゐていつしかも　この夜の明けむと　さもらふに　いの寝かてねば・・・」（巻三－388）では、明石海峡の潮汐の不思議を歌い、波立つ潮騒におののいて岩陰に避難していた様子を記している。「粟島に　漕ぎ渡らむと　思へども　明石の門波　いまだ騒ぎけり」（巻七－1207）では、明石海峡の波を避けて船待ちしている。さらに、「わが船は明石の湖に漕ぎはてむ　沖へなさかりさ夜更けにけり」（巻七－1229）では、沖に出ると流されるので港に寄るようにと歌っている。

実際、林崎の沖で生じる「イヤニチ」と呼ばれる特種な潮は、当時の小舟では越えられない難物であっただろう。これは、今でも「瀬戸のイヤニチ引き三分」と言われ、通常の上げ潮下げ潮の流れだけではなく、引き潮時の二時間ほど経過したころ、いきなり上げ潮がぶつかってきて三角波を立てる現象。この現象のからくりは、かつては海底地形の複雑さが成せる技とされていたが、最近の海峡部の海水交流の研究から、上げ潮時に淡路島の北西に生じる反時計回りの大きな渦が、引き潮時になっても巻き続けたまま海峡部に入り込んでくることにより、その渦の縁辺が行き違う潮となることが分かってきた。

また、地形によって出来る「クシャレ」と呼ぶ荒波のたつ場所が沿岸を塞ぐようにある。

したがって、明石海峡を航行する当時の船は林崎あたりで難渋し、この難所を避けるために船を陸に引き揚げ、陸路を迂回していくものもあったようだ。明石川のそばには「船上（ふなげ）」という地名が残る。

源氏物語では、須磨に流された光源氏が難儀しているところを明石の入道に救われるくだりがある。それには、舟に乗せられた平安貴族が川下りの舟より速く進む船足に驚いた様がありありと描かれている。須磨から明石への上げ潮に乗ったわけだ。

平家物語では、一の谷の合戦がある。平家の布陣をみると、山が迫り海をおさえれば背水の陣となるところ。ここには、「垂水・塩屋に干潮（ひしお）なし」という言葉かある。明石海峡の下げ潮が大阪湾に吹き出すとき、沿岸にはその反流が生じる。垂水や塩屋では、上げ潮のときには当然東から西へと流れるが、下げ潮のときも、この反流のせいで西への流れとなる。結局、この辺りの沿岸では東向きの流れはないということを教えている。だから、須磨一の谷は海から迫ろうにも、西からは潮をさかのぼることになり、船足が出ない。逆に、西に逃れようとすれば、いつでも潮に乗れる位置にあるわけだ。東からの敵に備えつつ、西への逃れ口を確保した布陣では、はじめから戦の結末を予測させるものではものではなかっただろうか。

5．新説　湊川の合戦

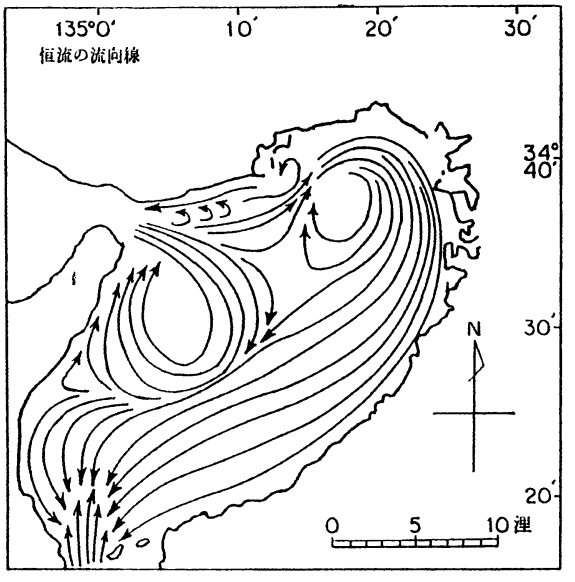
有名な楠木正成と足利尊氏の雌雄を決する戦いだが、正成は初めから玉砕するつもりで出陣したのだろうか。多くの歴史家、作家が語り尽くしたようなネタではあるが、戦前の修身の教科書にでてくる話は日本軍の神風特攻を合理化する作り話の臭いがしていただけない。

確かに、多勢に無勢の戦いで不利には違いないが、そんな戦ばかりしてきた策士である正成には、勝てる戦術がイメージ出来ていたはずである。その作戦の条件が外れたための惨敗であって、はじめから負けるつもりではなかったはずである。

湊川の合戦で鍵になるのは、海。足利軍のおびただしい船数に対して、新田・楠木軍には水軍の備えがなかった。多くの作家がこの説明に苦労しているのだが、海からの攻めを甘く見ていたとは考えられないだろうか。

この戦の数十年前、元冦の折の船戦の絵図を見ると、大船にいる元軍に対して、鎌倉兵は丸木船に毛の生えたような小舟で立ち向かっている。もちろん、先の源平の戦でも出てくる舟は小舟が主力。鎌倉時代の日本の造船技術では、大型化できる構造船はまだ作れなかったのだろう。魚住の擂り鉢のところでも述べたが、元冦の後の技術革新のうちに、構造船の建造技術があったことは、ここで重要になる。

もう一つのポイントは、潮流。先にも述べた



第5図　大阪湾における表面恒流の流向線図

図5　東流時は恒流図に似た流れとなり、垂水～須磨では西流となり「垂水塩屋に干潮なし」といわれる。
海峡から東南東に吹き出す流れは「別当の潮（堺潮）」と呼ばれる。
左の3図は『明石海峡漁業学術調査報告』1976. より

ように、須磨の沿岸の流れは西向き一方通行だが、その沖はどうだろう。明石海峡から吹き出す下げ潮は「別当の潮」とか「堺潮」と呼ばれる東向きの強い流れ。その呼び名の所以は、淡路島北端の岩屋に別当職を勤める寺があった。その寺に飼われていた犬が、なぜかしら時折木片を海に落としては流れゆく様子を見つめていたという。その犬がある日姿を消した。どこに行ったのかと思っていると、たまたま大阪の堺に出かけた人がその犬を見つけたというもの。犬は木切れにつかまって潮にのり、堺にまで流れ着いたのだろうという。現実には、この吹き出す流れは大阪湾の中ほどで弱くなってしまうので、そのまま堺に達することは出来ないのだが、西風でも吹いていれば、流れ着かないこともないだろう。閑話休題。

小舟では、沖に出て「別当の潮」にのるのは危険だから、沿岸航行を余儀なくされるが、大型構造船なら沖合を乗り切ることも出来るだろうし、和田岬あたりへは容易に達することができただろう。

一の谷の合戦を知り、水上輸送力を昔のままとみた新田・楠木軍は、小舟の軍船なら西から迫ってくるのは潮に邪魔されて足が遅く、大軍は運べない。新田騎馬軍の機動力があれば心配はいらないと予測していた。それより、山越えの山陽道を進んでくる相手を正成流の撹乱戦法で対処するつもりだったのだろう。

ところが、予想を覆して足利水軍が大挙現われたわけだ。見る見るうちに目の前の海を、予想もしていなかった大船団が東へ越してゆく。この時点で、正成は敗戦を覚悟したのだろう。

この状況を作りだした陰に、明石海峡の潮流を読み取り、「イヤニチ」を避けて本流に乗り出し、大軍を兵庫へ送り届けた水夫たちがいたことだろう。足利氏にとって、雌雄を決する戦に功労のあった人々を、鹿之瀬漁場の主に遇することは想像に難くない。

6．協業の漁村

彼らは、林村の立地条件を活かし、新しい構造船と強度の増したマダコ用タコツボを利用して鹿之瀬漁場を拓き、操業中に経験を積み会得した明石海峡の潮流を水運に活かし、漁場を集団で管理を出来る実力を蓄えていったことだろう。

今日でも、「林村の嫁さんは床の間に飾ってある。」と言われる。これだけでは、何のことだか分からない話だが、夫婦舟や浜売り婦人部隊の姿を漁村のイメージと重ねあわせる常識では理解し難い林村のありようを示している。実際、林村で漁師の家を訪ね、奥さんに旦那の舟の所在を尋ねても知らない人が多い。漁業は男衆の仕事で、女は出番がないというのが林村の流儀。

漁業はどこでも人手不足で、女手も重要な働き手とされるが、林村ではそうならないのはなぜだろう。沖で魚を釣ってくる仕事は、どうしても一隻づつの舟の単位の仕事になり、一匹狼になりがちだ。ところが、鹿之瀬に乗り出した林村では、大型漁船を数人で漕ぎ、大量のわら縄につないだタコツボを仕掛けていく。沖合いのことだから、当然漁場争いもあり、喧嘩となれば手もいるわけだ。結果として、集団での操業や防衛、荷さばきなどの仕事が男ばかりで行なわれるようになったのではないだろうか。

こうした集団作業の伝統が、網元による漁村の支配ではなく、昭和初期の巾着網の導入や近年のノリ養殖漁業にもみられる協業経営に結実している。これもまた、林村の特異な特長といえるもので、村の歴史が村人の意識を育てる好例といえる。

冒頭に述べた鹿之瀬漁場の質入れの件は、こうした集団の知恵が活かされているように思える。漁業権の裏書きを当初は支配者である武家に求めたのだろうが、栄枯盛衰の甚だしい中世にあっては、支配者は替わるもの。武家をあてにしていては勢力の変化で漁業権も奪われてしまう。この時代以降、実際に社会を支配するのは商業資本であると看破して、質入れしたとすれば、なんとしたたかなことか。質草になった鹿之瀬漁場は、明治時代になってようやく買い戻されたというが、それまで林村が漁業権を維持し続けた要素の一つに、商人に下駄を預ける集団管理の知恵があるだろう。

7．おわりに

素人なりに鹿之瀬漁場の漁業権の成立を探ってみたが、歴史の中に技術史の裏付けや潮流のいたずらなとを折り込んでみると、生き生きとした当時の人々の活動が浮かんでくる。

ここでは、秀吉の前の時代として室町幕府のお墨つき説を立ててみたが、如何でしょうか。明石海峡の船旅の折や、明石の魚を食べる折の話題のひとつにでもなれば幸いです。